

## 翻訳と通訳

平野 義明

化学生命工学部 化学・物質工学科 教授



「翻訳と通訳」と聞くと一般的には語学関連の話だと思うだろう。しかし、著者は科学技術の学際領域に身を置く者として、最近、『翻訳』と『通訳』を強く意識するようになった。KUMPで他学部、他大学との共同研究を行ったり、大学内でキャリア関連の仕事をしたりしている影響だと思う。

『翻訳』を辞書で調べてみると、その2番目に「符号やわかりにくい言葉、特殊な言葉などを一般的な言葉に直すこと。『技術用語を翻訳して説明する』」とある<sup>\*</sup>。また、『通訳』とは「当事者間において言語の相違その他の理由により意志疎通に支障がある場合、両者の間にたって互いの意図を伝達する人。日常会話、商談、外交交渉、討論、講演などに多く用いられ、まず逐語的に正確に訳すことが求められる。(中略)伝達内容が複雑になるにしたがって、通訳の教養・人格・総合的能力も求められるようになってきた」と書かれている<sup>\*</sup>。われわれの分野では『翻訳』は、まさに「(専門や)技術用語を翻訳して説明する」に該当するし、『通訳』は研究者間や異分野の人々との意志疎通の支障を低減することが役割である。他の工学分野の人に研究内容を伝える、医学分野の人に伝える、高校生に伝える、一般人に伝える…。状況に応じて専門分野に加えて『翻訳』と『通訳』のプロフェッショナルにならなければならない。

『翻訳』と『通訳』が充分機能すれば、医工連携や材料分野-機械工学-電気・電子工学の連携ももっと強くなる。専門用語を用いて伝えるのは簡単だが、相手が研究に興味を抱き、理解できなければ発展はない。新しい専門分野が開拓され、それに関わる領域が広がるにつれて、通訳の役割も増えるであろう。また、理系離れが進む昨今、小学生・中学生・高校生への『翻訳』と『通訳』が、今後の日本の科学技術を支えるためにも非常に重要である。

さて、大学生はどうだろう？著者は恩師から大学院受験の面接の前に、「どんな基礎研究であってもポンチ絵に描いて、その研究について相手が理解できる説明をするようになりなさい」と言われた。当時は、専門用語も使わずにこんな説明の仕方をすれば、私自身が高度な研究を理解できていないと判断されるかと戸惑っていた。しかし、今になればいかに大切な一言であったかと思う。現在の学生も、あの頃の私と同様である。就職活動における企業の技術面接で、専門用語や専門分野で使う略語を多用しているようだ。技術面接とは言え、技術“系”研究者が対応するのであり、全ての分野を網羅しているわけではない。また、文系出身者が同席していることも多々ある。次世代のためにも『翻訳』と『通訳』教育を行うべきではないだろうか。座学で修得できる事に加えて実際に話すトレーニングも必要である。今後の技術者教育に必要な課題だと感じている。

「井の中の蛙 大海を知らず」というが、『翻訳』と『通訳』という技術を身に着ければ相手の理解を得ることができ、蛙は井の中から大海へ飛び出していける。飛び出した世界には、まだまだ知らないことがたくさんありそうだ。

※松村明監修(2012)『大辞泉』(第二版)小学館